

英文を書きながら学ぶ英文法 —「単文・過去形」から始める 英作文「昨日の私」

Learning English Grammar Through Writing
—Essays Entitled “What I Did Yesterday”
That Start With Past-Tense Simple Sentences

山田昇司

YAMADA, Syouzi

経営学科

syouzi@alice.asahi-u.ac.jp

キーワード：授業実践、文法指導、書くこと、単文、過去形

論文要旨

英語基礎の授業は前期末に統一テストが実施される。出題範囲はシラバスで指定されている6つのUnitで、その中には「be動詞」「一般動詞」「名詞・冠詞」という文法項目が含まれている。これらの項目はどれも英文法の基本的事項であると一般には考えられているが、実際にはbe動詞と一般動詞における疑問文、否定文の作り方の違い、さらにそれに加えて現在形と過去形の場合の違い、また一方、名詞においては加算・不可算の区別、冠詞においては不定冠詞と定冠詞の使い分けなどその内容は多岐に渡っている。それらをいかにして学習者に定着させるかがこの授業担当者の大きな課題となっている。

筆者はそれらを集中的にドリルするために前年度に引き続いて今回も小先生方式を導入した相互テスト学習を導入したが、今年度はそれに加えて「日記による英作文」を試みた。学習者はまず最初に「単文・現在形」で特定曜日の生活習慣を書き、次には「単文・過去形」で前日の日記を書いた。「単文・過去形」による英文日記の方は続けて3回繰り返して書いたが、回を重ねる毎に英文数は増え、最初は10文程度しか書けなかった日記文が最後には30文を越えて書く学生も次々と現れるようになった。変化は英文数だけでなく、現在と過去を対比させた文や形容詞節を形成する埋め込み文などの多様な表現も現れてきた。

学期末の統一テストにおいては、担当した習熟度中位および下位のクラスの平均点が昨年度より5点以上上昇し、不合格者も一名も出ないという成果が現れた。学習者は英作文を書きながらテキストで学んだ文法事項をもう一度学び直していったと言えるだろう。

今回の試みは統一テストという制約下で特定の文法項目を意識した英作文指導を行ったのであるが、この指導ではどうしても単語置き換え的な英作文になるという限界がある。実際に学習者が表現したい内容はもっと豊かで複雑な内容を含み持っている。私の所属する英語教育の研究会JAASETでは、英作文についてはまず日本語でたっぷり書けるようにして、次にその日本語を英語にしやすい日本語に「和文和訳」する、つまり日本語を分解して英語にしやすい単文の日本語にするという手順を踏むことが重要であると提唱している。次回の英作文においてはそのことを踏まえた追実践を行いたいと考えている。

1. はじめに

本学経営学部の英語の授業は、1・2年次にはリーディング（R）とオーラル（O）に分かれて8科目開講され、3年次になるとRとOが統合されて2科目の開講となる。そしてこれらの10科目（表1）が英語の必修単位となっている。

表1 本学経営学部の英語履修カリキュラム

	1年前期	1年後期	2年前期	2年後期	3年前期	3年後期
リーディング	英語基礎	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ	英語Ⅳ	英語Ⅴ
オーラル	英語基礎	英語Ⅰ	英語Ⅱ	英語Ⅲ		

主に日本人教員が担当するリーディングの授業4科目及び英語Ⅳ、Ⅴ（表1網掛け部分）には基本的な文法事項を解説した統一のテキストがあり3年間通して使用することになっている。このテキストは文法項目毎に22個のUnitがあり、Unit毎に2頁分の練習問題が載っている。学生が最初に履修する「英語基礎」においては6つのUnitがシラバスで指定されており（表2）、前期末には統一試験が行われる。

表2 2008年前期における統一テキストの学習範囲

	Unit 1	Unit 2	Unit 3	Unit 4	Unit 5	Unit 6
文法項目	be動詞 （現在形）	一般動詞 （現在形）	be動詞 （過去形）	一般動詞 （過去形、 規則変化）	一般動詞 （過去形、 不規則）	名詞、冠詞

筆者は2008年度前期にこの科目の習熟度中位と下位の2つのクラスを担当したが、本論はその授業の中で行った英文による自由英作文についての報告と分析である。しかし次節ではまず、2007年度に初めて教えた時の「英語基礎」の授業の様子について述べる。

2. 英文のドリルに終わった2007年度「英語基礎」の授業

筆者は2007年度「英語基礎」の科目を習熟度中位クラスひとつだけを担当したが、授業の流れは概ね次のようであった。まずテキストの問題演習の答えを黒板に書かせてから大切なポイントを説明し、それからその中の英文をいくつか選んで暗唱させ、それに合格した学生にはその英文を5回ずつ書くように指示した。そしてその英文を次の時間の最初に小テストするという流れであった。前期テストの前3時間には問題が多く出題される基本問題を小先生方式も用いて口頭テストを行った。

このテキスト学習と平行して英語の基本的な語順SVOを学ぶために“THE BIG TURNIP”の和訳・英訳プリント（寺島隆吉編著（1993）を筆者が一部改作したもの）、さらに13連に分けてリズム読みテストも継続的に実施していた。学生たちは初めて取り組むリズム読みに最初は戸惑いながらも次第に上手に読めるようになっていった。また文法説明の時には42名の受講者の半数を占めていた中国人留学生の助けを借りて日本語と英語だけでなく中国語も加えて語順の違いなどを解説することもあり、教師自身も様々な発見がある授業だった。

しかし全体としてみれば、基本的にはテキストにある英文をドリルして覚えさせるだけに終わったような授業だった。統一テストはマークシート形式50満点で基本的な問題がほとんどであるが、平均点は30点足らずで10点台の学生が5人もいた。

3. 有利な条件下での今年度の「英語基礎」

今年度前期は先に述べたように習熟度中位（金曜クラス）と下位（中位なしの下位。木曜クラス）の2つを担当することになった。昨年に引き続いて2度目の授業であることと2つのクラスを同時進行で教えていくという有利な条件があった。

3.1 「語順訳」で文法説明の導入

今回の英語基礎の授業においては次のような変更を行った。ひとつは、テキストの問題演習に先立って『魔法の英語』（寺島隆吉・寺島美紀子編JAASET著2001）から関連の文法項目があるレッスンを抜き刷りして学生にやらせたことである。これは辞書不要の和訳練習帳で、学習者はヒント欄にある単語の意味を見ながら「語順訳」「立ち止まり訳」「足し算訳」を順に書き込んでいくだけで英文の意味が取れるように工夫されている。元の英文は教科書（WORLD I、1990年版、三友社）から採録されているものなので文法項目に対応するレッスンを簡単に見つけ出すことが出来る。（表3）

表3 統一テキストと補助テキストの文法項目対照表

統一テキスト		『魔法の英語』	
Unit 1	be動詞（現在形）	Lesson 2	Where Are You From ?
Unit 2	一般動詞（現在形）	Lesson 5	An Angel on a Skateboard
Unit 3	be動詞（過去形）	Lesson 7	Siebold and Otakusa
Unit 4	一般動詞（過去形、規則変化）		
Unit 5	一般動詞（過去形、不規則変化）		

※Unit10（名詞・冠詞）については直接該当するレッスンはない。

この和訳練習帳の抜き刷りプリントを授業の始めの15分ほど取り組ませ、その後その英文を使って該当の文法項目を説明した。例えば Lesson 2 の英文では is/am/are に対応する主語の人称を言わせたり、Lesson 5 では三単現の s がついた動詞を指摘させたり、Lesson 7 ではbe動詞の過去形 was や一般動詞過去形の2つの形（called, loved, planted, named vs. came, taught, had, became, took）に注目させるなどした。そしてそれからその日に学ぶ統一テキストの文法項目を簡単に板書説明した。

この和訳練習帳を採用した理由は文法項目を帰納的に導き出すというねらいの他に、学習者が持っている英語力の診断という目的があった。というのはこの練習帳の語順訳欄は編著者の寺島隆吉氏がよく言われるように「英語学力のリトマス試験紙」の働きをするからである。

その典型的な例が、今回もクラスに数名ずついたのだが、be動詞の空欄に「～は」と書き込む学生がいるのである。つまりその学生は I'm Japanese. He is Russian. という英文を「私は日本人です」「彼はロシア人です」という意味に丸ごと対応させているだけで、am や is が動詞であるという意識、さらには英語が「名詞・動詞・名詞」という順番で並んでいるということとを全く考えたこともなくこれまで英語を学んできたことになる。しかしこの練習帳の語順訳欄において日本語を英語の語順に並べてみる作業をする中で初めて英語の「名詞・動詞・名詞」の語順を認識出来るようになってくるのである。

3.2 復習にも「語順訳」英作文プリント

この和訳練習帳のプリントに加えて、今回は前時の復習用に語順訳つき英作文プリントも作成した。この英作文問題はこの統一テキストの教授用資料に付随しているもので、各unit毎に7～8文の日本語が載っている。その日本語に記号付けして、その下に英語の語順通りに日本語を入れる語順訳欄を作っ

た。

富士山は [静岡県に] (あります)。
 _____ () [~に _____]

- ←記号付けされた日本語
- ←日本語で書き込む英語の語順訳欄
- ←英語を記入する余白

学生は授業の始め5分間にこの復習用の英作プリントに取り組む。日本人学生はすぐにこのプリントの形態に慣れて出来るようになったが、中国人留学生の中にはこの語順訳欄にすぐに英語を書き込んでしまって日本語で穴埋めすることを厭う者が最初は何人もいた。彼ら／彼女らは来日して半年間、留学生別科で日本語を学んできたのではあるが、日本語の単語をこのような順番に並べることには何かしらの心理的な抵抗を感じるのであろうか。

3.3 「作業」→「説明」の繰り返しが作り出す授業への集中

いま述べたような新たな変更によって今年度の授業は概ね次のような流れになっていた。

授業内容	所要時間	学習形態
1) 前時の復習のための英作文プリント	5分	個別
2) 『魔法の英語』からの抜き刷りプリント	15分	個別
3) 文法項目の説明 (学生に質問しながら)	10分	一斉 (問答)
4) 学生が自分でテキストの問題を解く	10分	個別
5) 教師の指名により黒板に答えを書く	10分	個別及び相互
6) 教師による説明	5分	一斉 (問答)
7) 音声教材 (“There’s A Hole” 及び “Do-re-mi Song”)	残り35分	

5) における学習形態が「個別及び相互」となっているのは問題を指名された学生が分からないときには周りの学生の誰かに尋ねるようにと指示しているからである。中には誰にも相談できずに教師に聞きに来る学生もごく少数いるが、ほとんどの者は何とか答えを見つけ出してきて (聞き出してきて) 黒板に書き込んでいた。

7) の音声教材については今年はリズム読みがやりやすい歌を2つ選んだ。どちらも英語の後置修飾について学ぶのに適した教材である。和訳プリントに取り組んだ後に横一列3~4名のグループでリズム読みテストを受けた。

全体の構成としては、前半60分の文法学習において「作業的活動」と「教師による説明」が交互に繰り返されている。そして後半30分は音声学習する教材を使っている。このような変化をつけることによってほとんどの学生は90分の間、私語をしたり他事をすることなく授業に集中できていた。

3.4 中間アンケートで学生の声を聞く

上記のような授業の構成で7時間を教え、ここまでで統一テキストの指定範囲は全て終えることができたが、ここから先の残り8時間については当初から何らかの形で復習を行うつもりをしていた。最初に思いついたのは別の文法テキストから同様の問題を持ってきてやらせることだったので、8、9時間目の前半を費やして再び文法の問題演習を行った。

またこれと平行して8時間目の最後に中間アンケートを採った (註1)。A4サイズ半分の大きさの用紙に「これまでの授業で分かったこと、まだよく分からないこと」をひとつずつ挙げさせた。この回答の中には「英語の並べ方が分かった」という感想が何枚も出て来た。これは2種類の語順訳プリントの効果であると言って間違いのないであろう。

ところが一方で「疑問文や否定文の作り方がよく分からない」という声も何枚か出て来た。そこで次

の時間にbe動詞と一般動詞の疑問文・否定文を作り方の違いを説明するプリントを作成して再度説明した。しかし私はこの時点で同様な文法問題演習を繰り返していてもあまり効果は期待できないのではないかと思い始めていた。

3.5 文法事項はどんなときに習得されるのか

では一体何をどうしたらよいのだろうか。この時思い浮かんだのが「学習者は英作文を書こうとするときに初めて文法事項の必要性を本当に感じ、それを使うことによってその文法事項を習得する」という寺島隆吉氏（JAASET代表）の言葉であった。いつ聞いたのか、どこで読んだのかはその時点でははっきりと思い出せなかったが（註2）、一度自由英作文を書かせてみようと思った。それぞれのクラスは27人、20人なので添削をするのが結構大変になるのではないかとも思ったが、毎時間徒勞を積み重ねていくよりははるかに見通しがあってやりがいのある仕事のように思えた。

3.5.1 英作文のスタート

次節からは10時間目から14時間目に渡って実施した英作文の授業の様子を報告する。最初の1時間目は「現在形」を用いた英作文を書き、その後の4時間は「過去形」を用いた英作文を書かせた。授業時間90分間の前半50～60分が英作文の指導にあてられ、残りの時間は統一テキストの演習問題を口頭テストする時間に使われている。

3.5.1.1 現在形で「習慣」を書く

3.5.1.1.1 英作「私の金曜日」に質問続出

私は10時間目にまず「私の金曜日」(木曜日に授業のある学生には「私の木曜日」というタイトルで現在形ばかりの英作文を書かせてみることにした。私は学生にB4版の大きなレポート用紙を配って、「君たちの金曜日は授業は時間割で決まっているし、起きてから寝るまでも毎週だいたい同じはずだ。現在形は<習慣>を表すのだから、それを使って自分の金曜日を書いてみなさい」と言い、黒板に以下のような英文を次々と書き出していった。

起床	I get up at ____.
朝食	I eat ____ for breakfast.
通学	I come to the university by ____.
2時間目	I take ____ for the second period.
昼食	I eat ____ for lunch.
3時間目	I take the English Reading class for the third period.
帰宅	I go home by ____.
夕食	I eat ____ for supper.
夕食後	I _____.
就寝	I go to bed at ____.

学生たちは英文を写して下線部に数字や単語を入れていくだけでいいのだが、「みそ汁は何と言うのか」とか「2時間目の経営学概論が分からない」といった質問の声が始まった。そこで私は「ひとり1個は質問しなさい」と言ってから、机間巡視をしながら学生の質問を聞くことにした。そして出た質問についてはその答えを次々に黒板に書き出していった。特に夕食後については「アルバイトをする」「テレビを見る」「友達と遊ぶ」「音楽を聞く」「ゲームをする」「風呂に入る」などの表現について次々と質問が出された。これまでの授業では学生は教師からの質問に答えることがほとんどであったが、この英作文

の中で「多様な意味を持つ現在形よりも意味も確定し形態も簡単な過去形から教えた方が学習効果がある」(筆者による要約：註3)と述べている。次節からは「過去形」で書かせた英作文の授業(11～14時間目)の報告に入る。

3.5.1.2 過去形で「昨日の私」を書く

3.5.1.2.1 一回目の「昨日の私」

11時間目は最初に私は学生の作文を見てのコメントをいくつか板書しながら書き出した。まず最初に強調したのは語順の問題である。

日本語	私は	～	(……)
英語	I	(……)	～

この時私は板書して説明しただけであったが、学生に自分の英文の動詞に丸を付けさせる作業をさせてもよかったと後で思った。また他には質問や誤りの多かったいくつかの英語表現、例えば、「a.m.7:00は誤りでa.m.は時刻の後ろに付けること」「乗り物は by でいいが、歩いては on foot になる」ことなどについても説明してレポート用紙の上段にメモさせた。それから今回の作文の元になる英文を前回と同じように黒板に書き出した。

起床	I got up at ____.
朝食	I ate ____ for breakfast.
通学	I came to the university by ____.
2時間目	I took ____ for the second period.
昼食	I ate ____ for lunch.
3時間目	I took ____ for the third period.
帰宅	I went home by ____.
夕食	I ate ____ for supper.
夕食後	I ____.
就寝	I went to bed at ____.

今回の作文ではまず授業科目名の質問が出た。なぜなら前回の作文では「私の金曜日」というタイトルで金曜日の習慣を綴ったのだが、今回は「昨日の私」という題なので木曜日にある授業科目名を入れなくてはならないからだ。私は前回と同様に教室を周りながら質問を聞きその都度その答えを黒板に書いて全体に知らせていった。作文を書くことは授業時間の前半45分ほどで終わり、作文を提出した学生から順次テキストの演習問題の口頭テストに入った。ふたりの学生が今回上限の3個まで合格して小先生となった。

授業後に回収したプリントを見ていると、次のような接続詞の and を用いている英文をふたつ見つけたので、単文の発展形(重文)として次の時間に紹介することにした。

I read to Gin Tama and listened to Kaera's アルバム, (添削で read の後の to を削除)
I cut hair and colored yellow. (添削で hair の前に my, colored の後に it を挿入)

次の過去形作文にはもうひとつ追加したい項目があった。それは一般動詞の過去形だけではなくbe動詞の過去形も使わせることであった。そう考えた直接の理由はテキストの履修範囲にbe動詞があったからであるが、実際にも自分の英作文でbe動詞を使ってみて一般動詞との違いを習得してほしいと考えた。

3.5.1.2.2 二回目の過去形作文で英文量が一気に増加

12時間目は2回目の「昨日の私」作文を行った。前節で述べた2つの項目を板書して説明した。後者については次のような例文を使って説明した。

過去の事実	それに対する自分のコメント
I worked at Restaurant <i>Katumi</i> .	The work was tough.
I read comic books.	They were interesting.

学生たちの中から早速これらの表現を取り入れて自分の作文を書き始めるものが次々と出て来た。以下にその英文をいくつか紹介する。()内は添削による訂正である。

I came to the university by bicycle and take 5 minutes.(...and it took me 5 minutes)
 I ate bread and drank milk for breakfast. (...and drank milk...)
 I read novel and listend instrumental music.
 (...read a novel and listened to instrumental...)
 I ate B set menu for lunch. It was a delicious meal. (...a B set menu...)
 I took Accounting for the third period. The teacher is Mr. Haba. It was very tired.
 (I was ...)
 I listen to Oasis's album. Oasis is a very good band! (I listened to...)
 I ate nothing for lunch. Therefore I was very hungry.
 I ate egg for breakfast. It was small egg. (...was a small egg.)

新しい文の形式(重文&be動詞文)を与えることで学生の書く英文の数は一気に増えた。一回目の過去形作文ではほぼ全員が10文程度だったものが、今回は20文を越えて書く学生が10名を越えるように変わってきた。実はこの授業では私は学生に「今回の目標は20文」と宣言していたのだが、ただ掛け声だけでその目標が達成されるとは考えられない。新しい文の形式を与えたことがその大きな要因であることは間違いないだろう。

英文量が増えたもうひとつの要因として考えられるのは、「昨日の私」という全く同じタイトルで書かせていることである。学生の側からすれば全てを新しい文で書き直そうとすれば気の重い仕事になるだろうが、教師の方は「<1週間前の昨日の私>も<昨日の私>もそう変わらないでしょう。同じ文がたくさんあるはずだからそれはそのまま前のを写せばいい」と言っているので学生は随分気が楽になるのだろう。

不思議なことには「同じであってもよい」と言われても学生は何かしら新しいことを表現したくなるものなのである。今回の第二回目の過去形作文においても新しい内容を新しい形式で表現しようとする学生がいた。

I changed on's clothes and waching news.

この英文は間違えだらけの英文であるが、おそらく彼は朝の慌ただしい中で「ニュースを見ながら服を着替えた」と言いたかったのではないかと私は推測した。そこでこれを3回目の過去形作文の最初に「分詞構文」の表現のひとつとして紹介しようと思った。

3.5.1.2.3 「JUNCTION」習得における一定の困難さ

三回目の英作文の最初には前節最後で述べた「分詞構文」と併せて、現在形作文「私の金曜日」で言及したJUNCTION表現「拾った猫」(3.5.1.1.2節)についても思い切って導入してみようと考えた。JUNCTION表現が彼ら/彼女たちの頭の中に自然に湧き上がってくるものであるならばそれを英語でも与えるに臆することはないと考えた。

この時の金曜クラスの板書は以下のものであった。(太字の箇所は実際は赤字)

- (1) I changed my clothes, watching the news. ニュースを聞きながら
 I came to the university, listening to music. 音楽を聞きながら

- (2) I (bought) a hamburger.
私はハンバーガーを買った。
The hamburger [I (bought)] was good.
[私が (買った)]ハンバーガー は、おいしかった。
- I (work) at the convenience store.
私はコンビニで働いている
The convenience store [I (work) at] is Mini-stop.
[私が (働いている)]コンビニ は、ミニストップです。

ところが、この時の金曜クラスでは前者の「分詞構文」を使って書かれた英作文は20人中わずかに2人、後者のJUNCTIONについても4人しかなかった。私は一度に2つの新しい形式を与えることには少し無理があったと判断し、次の木曜クラスではJUNCTION表現ひとつに絞って提示することにした。その時の例文は次のように少し変えてみた。

- (1) I (bought) a magazine.
私は雑誌を買った。
The magazine [I (bought)] was interesting.
[私が (買った)] 雑誌 は、面白かった。
- (2) I (ate) curry and rice.
私はカレーライスを食べた。
The curry and rice [I (ate)] was hot.
[私が (食べた)]カレーライス は、辛かった。

すると今度は17人中7人が自分の英作文の中にJUNCTIONを使った英文を書いてきた。以下にその例を原文のまま紹介する。

- (1) Rice and miso soup I ate was delicious.
I came to the university by train and bus. The train I took was late. I was trouble.
- (2) The break fast I ate was good.
- (3) the breakfast I ate is pan. Pan I ate was very good.
- (4) I watched TV. The TV program I watched was クイズヘキサゴンII.
- (5) Breakfast I ate was delicious.
- (6) Kimuchi I ate was delicious.
- (7) sunny-side up egg I ate was very good.

またどちらのクラスにも次のような「出来かけ」の思われるようなものもありこの構文の習得には一定の意識的な努力が必要であることが推測される。(原文のまま)

- (8) A bread I baked at 9:20. A bread and an apple I ate at 9:30
- (9) I ate lunch is pan.
- (10) I ate curry and rice for dinner, I boughth was good.
- (11) The restaurant I wark at very busy.

3.5.1.2.4 意外な表現が出てくる面白さ

金曜クラスの3回目の過去形作文には現在形と過去形を巧みに対比させようとした次のような英作文があった。この文を書いた中国人留学生は動詞の時制を間違えてはいるが、「現在の習慣, but 昨日の出来事」という対比で文を書こうとしていることが分かる。

I came to the university by bicycle. on weekdays it took me 5 minutes
but, yesterday I saw a snake. be surprised, unpleasanted so it took me 7 minutes.

そこで4回目の過去形英作文の時(第14時間目の金曜クラス)にはこの文を全体に紹介した。すると

同様の対比を使って英作する学生が6人も出て来た。以下に原文のまま紹介する。

- (1) I always work at Ohsyou restaurant in the night, but I didn't work a Ohsyou restaurant yesterday. I was happy.
- (2) I always go to the university, but I didn't go to the university this day.
I always take a shower, but I didn't take a shower this day.
- (3) I took Basics of Social Life for the second period. I always think this class is boring.
- (4) I always eat a breakfast, but I didn't eat a breakfast this day.
- (5) I always brush my teeth every night, but I didn't brush my teeth last night.
- (6) I always get up at 8:30 a.m. in the morning, but I got up at 9:00 a.m. Because I was in a hurry.

現在形でスタートした後で過去形英作「昨日の私」を3回続けて書いてきたわけだが、このように過去形と現在形が対比された英作文が出てくることを私は全く予想しなかった。

またこの他にも、テキストではまだ教えていないが昔習ったであろう「過去進行形」を使って、I took Introduction for Accounting for the third period. I was sleeping. と書いてくる者もいたり、統一テキストに載っている例文を利用して英作文（英借文）する学生も次々と出て来た。このような文を見るにしたがって、私自身最初は重荷に感じていた作文添削が次第に驚きと発見のある楽しい仕事に変わっていった。

3.5.1.3 4回目の過去形作文——B4用紙をはみ出す学生も

私は毎回「今日は20文以上」「今日は25文以上」と少しずつより高い目標を学生に提示してきた。そして14時間目、すなわち「昨日の私」英作の4回目には「今日の目標は30文以上」と宣言して英作文を始めた。すると金曜クラスでは12人、木曜クラスでは6人がその目標をクリアした。最後に30文以上書けなかった学生たちを見ても、始めは10文ほどしか書かなかった多くの者が最後には20文、25文以上書けるようになってきている。中にはB4用紙をはみ出すぐらいに書く学生や裏にまで英文を書いてくる学生も出るようになった。

最もたくさん書いた学生のひとりである一人の男子学生（金曜クラス）がどのように彼の英作文を発展させていったかを以下（表4）に分析してみた。

表4 ある男子学生が書いた5回分の英作文の分析

		文の構造							時制、動詞の種類、文の種類								備考	
		単文			複文				現在形				過去形					
		S V のみ	分詞 構文付	重 文	主 文 + 従 文	親 文 + 子 文	埋 め 込 み 文	一般 動詞		b e 動詞		一般 動詞		b e 動詞				
								肯 定 文	否 定 文	肯 定 文	否 定 文	肯 定 文	否 定 文	肯 定 文	否 定 文			
現在形	1	13	13							12	1							
過去形	2	15	15									1		14				
	3	23	20	1	1	1						1		19		4		重複1
	4	24	17	2	3	2						1		21	2	5		重複5
	5	31	20	2	5	2	1	1*	5			1		24		10		重複10

この表を見ると彼が英作文を書きながら様々な文法項目使っていることが分かる。寺島（1997）が指摘するようにまさに彼は「書きながら文法を学んでいる」のであり、教授者側から見れば「書かせながら文法を教えた」と言っていいただろう。もちろんこのことは、彼がこれまで受けた英語教育で学んだも

のが再び彼の中に蘇ってきたと言った方がより適切であろうが、それをいかに上手く蘇らせるように指導したかが評価されてもいいのではないかと思う。

この表をもう少し仔細に見てみたい。英文数が単純にどんどん増えているのではなく3回目から4回目にかけては停滞しているように見える。(表4の網掛け部分)しかしこの時彼が書いた「分詞構文付き単文」「重文」「複文」の数は増えているのである。この時点で彼の作文が質的に変化したと捉えることは出来ないだろうか。その時の英文を以下に紹介する。(原文のまま)

- I got up at 8:30 am, but I was very sleepy. 重文
- I came to the university by train and bike, listening to Aiko's album. 単文(分詞構文付き)
- I ate cup-nudol, because I didn't have the rest money. 複文(主文+従文)
- I was very sleepy, but I got up very hard. 重文
- I was depressed, because I didn't sell a remainder shoes. 複文(主文+従文)
- I was tired, because right away I took a bath at 0:00 am. 重文(becauseはsoの誤り)
- I watched TV, cooling body. 単文(分詞構文付き)

もうひとつ最後に注目したいのは、彼が「埋め込み文」を使ってThe shoes (shop) I work at is ABC-MART in Ogaki.という英文(*)を書いたのが最後の時間であったことである。このことは先に述べた「JUNCTION」習得の一定の困難さを示すのではないかと推測される。

3.5.2 英作文指導の「成果」

さてここまで筆者が今年度前期に行った「英語基礎」の授業について述べてきたが、確認のためにもう一度以下(表5)に大きな流れを記す。

表5 2008年度「英語基礎」の授業の全体像

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
授 業 内 容	<毎時の流れ> Unit復習語順訳プリント Unit導入用語順訳プリント Unitの文法事項説明 演習問題の解答および説明							文法復習 プリント "Do-re-mi Song" 中間アン ケート (8時間目 の最後)	英作文指導						口頭テ スト最 終回 記述用 復習プ リント 配布

前期末の統一テスト(50点満点)では平均点は金曜クラスが34.2、木曜クラスは35.8となった。昨年の平均点は30点に届かなかったのでそれよりは確実によくなった。また昨年の中位クラスでは34人中5人もいた10点台の学生が今年はひとりも出なかったことも嬉しいことであった。もちろんこのような点数の高低は母集団やクラスサイズが異なることを考えると単純な比較が本当に出来るのかという疑問も残るが、しかし少なくとも今回は、私自身が教えることを面白くかつ楽しく感じたという点で前回より間違いなく前進したと言える。英作文指導を始めてからは学生の方からどんどん質問するようになりそれまでの緊張した雰囲気や和んでいくのを感じられたし、また小先生方式を導入した演習問題口頭テストでは級友の解答を一生懸命聞いてやっている学生の姿をどちらのクラスでも毎回見ることが出来た。

また学生の作文を読んで彼ら／彼女たちがどんな大学生活を送っているのかを知ることが出来たことも私自身の学生理解にとってとても大きな収穫となった。

木曜日クラスには授業開始後すぐに突っ伏して寝ようとする男子学生がいた。その度に質問をするなどして何とか起こそうと努めていたが、英作文指導の何時間目かのときにも彼は何も書かずに寝ようとした。私は彼の朝からの生活を尋ねて黒板に英語で書きこれをそのまま写せばよいと言ったのだが、その時初めて私は彼が厳しい練習で知られる自転車部の学生で朝5時に起床して朝練習に参加していることを知った。

また中国人留学生が学費や生活費を稼ぐために学業の傍ら必死に働いていることも彼ら／彼女たちの作文から改めて知ることになった。次の英文はある女性の書いた文である。

I had a part-time job from the day before yesterday to yesterday morning. I went home at 6:00 am. and took a shower. I ate a little bread and milk for breakfast. After that I went to bed at 7:00 am. I'm very tired and feel sleepy. I got up at 10:20 am. and feel sleepy too. I came to the university by bicycle and it took me 5 minutes. (中略) I took a Basics of social life class for the 2nd period. I eat curry and rice in the dining room. After that I came the feeling room. and I slept a little time. (後略) 原文のまま

4. おわりに

今後の課題としてはこの「成果」をどのように後期の授業に繋げていくかである。何らかの形で書き続けていくことが大切であると思うからである。

後期のシラバスには「進行形」「代名詞」「形容詞」「副詞」「接続詞」という文法事項を扱うUnitが含まれているが、特に「接続詞」に注目して作文指導に生かしていきたいと考えている。というのは、今回の作文指導では寺島（2000：152）が自己表現の方法として提示している「5. 単文の構造はセンマルセンである。それを接続詞でつなげていく。6. 接続詞はしたがってAND, BUT, OR, FORの4つだけで、従位接続詞は使わない。」という部分がしっかりと意識的に追実践されていないからである。

補節：JAASET 2008 実践研究発表会での討議

大学で統一テキストを使うようになった経緯について質問があった。これについては寺島隆吉・寺島美紀子両氏より以下のような説明があった。1993年に東京大学教養学部で *the Universe of English* という共通英語テキストが使われるようになったのがきっかけで全国の大学にもその動きが波及した。また学生にToeic試験のような統一テストを受験させる大学が増えてきたことももうひとつの要因として考えられる。東大では共通テキストによって授業がそのマニュアル通りに行われて画一化し、創造的な授業作りが妨げられている実態（註4）がある。

本実践については、統一テキストの文法項目にはこだわらずに、まず日本語でたっぷり書かせてからその一部分を英作させた方がより豊かな内容の英作文が生まれてくるのではないかという指摘があった。「Aさせたいと思ったらB指示せよ」という言葉が示すように、英語を書かせようと思うなら遠回りのようでもまず日本語力を鍛えることから始めるということである。

このことを踏まえて「話せるようになる英作文」の構想を以下（表6）のように考えてみた。

表6 授業構想案「話せるようになる英作文」

	指導の手順	使用言語
1	映像の視聴、資料の輪読を行う	日本語
2	日本語で感想をたっぷり書く ※作文の手引き	日本語
3	相互輪読してコメントを書く	日本語
4	その中で自分が一番いい文をいくつか選ぶ	日本語
5	選んだ日本語を単文に分解する ※単文分解練習プリント	日本語
6	その単文を英語の語順に並べ替える	日／英
7	辞書を使って英語に置き換える	英語
8	出来上がった英文を相互添削する	英語
9	スピーチ用メモを作る	英語
10	スピーチ発表する	英語

映像に関しては、欠席した学生にその映像を見る機会をどのように与えるかも問題になってくる。Democracy Now! Japanにある字幕付き映像ならばその学生が自分でアクセスして見ることが出来るが、映画やドキュメンタリーであれば、複数本購入したりダビングしておく必要があるだろう。後期の英語Ⅱの授業は教室変更してLL室を使用することになっているので、実験的に2,3の映像でこの形態の授業を試してみたいと思っている。

REFERENCES

- 佐藤良明・寺島隆吉 (1993)「東大の共通テキストをめぐって (対談)」『現代英語教育』1993年11月号, pp. 32-37
- 寺島隆吉 (2000)「読み書きの構造表」『英語のって文法とは何か』(pp.113-169), あすなろ社／三友社出版
- 寺島隆吉編著 (1993)『大きなかぶ』三友社出版
- 寺島隆吉 (2000)「先住民の闘いから何を学ぶか：英語自己表現の授業を通じて」『国際理解の歩き方』(pp. 148-162), あすなろ社／三友社出版
- 寺島隆吉 (1997)「和文英訳と自己表現 (上)」*Applied Semiotics* Vol.2, No.9
寺島研究室 <http://www1.gifu-u.ac.jp/~terasima/article1writing021226.html>
- 寺島隆吉・寺島美紀子編, JAASET著 (2001)『魔法の英語：ふしぎなくらいに英語がわかる練習帖』, あすなろ社／三友社出版

NOTES

1 中間の授業アンケートを取ることは当初考えていなかった。しかしちょうどこの頃に私の所属する研究会JAASETの掲示板において、その実践報告を1年以上に渡り継続的に投稿されていたある先生に対して匿名で批判投稿がなされるという問題が起こっていた。自らの名前や立場を明らかにしない非礼な投稿ではあったが、会の代表である寺島隆吉氏は真摯に対応され丁寧な返信を書かれた。この時の寺島氏の返信はJAASETメルマガ2008年5月号に掲載されたが、この中で氏は次のように述べている。この言葉が私に中間アンケートを取らせる直接のきっかけとなった。

しかし、自分が優れた良い方法だと信じているからといって、それを頑固に押し通すことは教師の取るべき道ではありません。しばしば記号研の会員から「私の実践は正しかったのでしょうか。ぜひ御意見をください」と実践報告が送られてくることがあります。そのとき私は必ず、「実践の正しさは私が決めるのではなく生徒が決めるのです。生徒から『楽しい、しかも力がついた』との反応が得られれば、その実践は正しかったのであり、そうでなければ、その実践はどこかで間違っているのです」と答えてきました。私が記号研方式（TMメソッド）の創始者だとしても、実践の正否を決めるのは私ではなく生徒なのです。

2 本論を書くにあたって確認したところ、寺島隆吉氏は「和文英訳と自己表現」(1997) という論文の中で次のように書いている。

もともと文法というものは「読みの武器」というよりは「書くための武器」だから、文法力は「書かせながら」すなわち「和文英訳」の練習の中でこそ身に付いていくものではないか。言い換えれば「文法を教えるから書かせる」のではなく、「書かせながら文法を教える」のが正しいのではないか。なぜなら、英文に記号がついていて単語の意味さえ分かれば、文法なしでも文章の意味はだいたい「読み」とることができるが、「書く」ほうは文法無しでは一歩も進まないという側面があるからである。

3 「現在形」と「過去形」に関する寺島隆吉（2000：127および163）の指摘は次のようである。少し長くなるが以下に引用する。

動詞の現在形（とりわけ動作動詞の現在形）は、「現在」の動作を示してはいない。なぜならいま進行中の動作を示すのは現在進行形であって現在形は「習慣」や「真理」を表すからである。（p.127）
——Notes1. このことから動詞の単純形というのは、進行形や完了形のような複合形と比べて意味が単純ではないということがわかる。とりわけ現在形というのは「習慣」「真理」「劇的現在」「未来」などの多様な意味を表す。それに比べて過去形の示す意味は過去時における「事実（習慣も含めて）」「状態」にほぼ限られている。／したがって私は現在形よりも過去形から教えた方が（しかも不規則動詞よりも-edのつく規則動詞の過去形から教えた方が）学習効果があるのではないかとすら考えている。その方が意味も確定しているし、形態の上からも簡単だからである。（後略）(p.167)

この中で寺島氏は「不規則動詞よりも-edのつく規則動詞の過去形から教えた方が」と述べているが、学生が書く日記文においては日常的な動作を表す動詞を使う場面が多く、従って規則変化動詞よりも不規則変化動詞の方がよく出てくる。しかし「過去の事実の一回性」という簡易性から考えればやはり「過去形」の方が書きやすいことは間違いないであろう。

4 東京大学に共通テキスト*the Universe of English*が導入された経緯およびその問題点については佐藤・寺島（1993）の対談の中で詳しく述べられている。このテキストの作成に中心的な役割を果たした佐藤氏はこのテキストは「講読スタイル授業」「大半が和訳する試験」という英語授業を改革しようとする中から生まれてきた、少人数授業の英語Ⅱを実現するための「大人数授業英語Ⅰ」用にこのテキストを作ったと述べている。実際の授業はマニュアルに従って、①ビデオによるイントロ、②教師の説明、③理解度確認テスト、④発展した話題についての聞き取りテスト、⑤テスト、⑥次回授業のビデオという手順で行われ、クラスサイズは65～318人となっている。これに対して寺島氏は「学生に毎回試験を受けに授業に来ているという精神的ストレスを与えているのではないか」「教師の個性が印象に残っていない」「題材が多様でよく選ばれてはいるが、あるテーマを集中して追いかけていけない。また語彙が次々と変わってゆくの学習者の予習が大変である」といった問題点を指摘している。